序

2020年３月に発足した群馬県立世界遺産センター(「世界を変える生糸の力」研究所、略称セカイト)は、毎年の研究活動の成果を、『紀要』として刊行しておりますが、ここに第３号を2023年(令和５)３月に刊行することが出来ました。日頃からセカイトの活動をご支援、ご協力頂いている多くの関係者の方々に対して、心からお礼を申し上げます。

冒頭に掲げた講演記録「『富岡製糸場と絹産業遺産群』の世界遺産としての価値～次世代へのメッセージ」は、富岡製糸場解説員の会(会長神保尚武氏)の依頼により、石井が解説員の方々に向って、2022年４月18日に富岡市生涯学習センターにおいて行った講演です。世界遺産としての価値を若い世代にどのように伝えるかについて日夜苦労されている解説員の方々に、富岡製糸場が日本製糸業全体を主導していた最盛期である明治維新から世界大恐慌にかけての歴史について、ポイントを絞ってお話しし、議論しました。ここでの歴史の捉え方はひとつの試みに過ぎず、より多面的な研究が必要なことは言うまでもありません。

次に掲げた第３回セカイト講演会「伊勢崎の絹産業～蚕種から銘仙まで～」は、田島弥平(1822 ～ 1898)の生誕200周年を記念して、2022年11月26日に、伊勢崎市の絣の郷・円形交流館多目的ホールにおいて、同市との共催で行った講演会の記録です。蚕種製造に尽力し、日本の絹産業の発展に大きく貢献した田島弥平の功績を独創的な観点から多面的に振り返った宮崎俊弥氏(共愛学園前橋国際大学名誉教授)の講演と、伊勢崎が誇る織物(伊勢崎銘仙)を通じて日本の絹産業の発展と絹の大衆化を論じた井上直子氏(城西大学経済学部准教授)の講演を収録しました。世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」の価値が、これまでと異なる長期的・世界史的視野のもとに示されています。

その下の４論考は、セカイト研究員３名によるものと、飯島義雄氏による投稿論文です。飯島論文は、荒船風穴の位置付けを風穴だけでなく各地の氷室とも対比して明確化し、中島論文は、業界誌に載った大量の風穴広告を利用して風穴冷蔵の実態に迫ります。春山論文は、高山社の研究機能の高まりを一代交雑種の開発との関りで示しつつ、前号で究明した教育機能の低下こそが同社の限界をもたらしたという主張を裏付けます。今井氏の研究ノートは、戦間期において日本独自の多条繰糸機が特許の壁を潜り抜けて中国へと技術移転されて行く様相を追跡せんとする中間報告です。

なお、セカイトでは、2022年１月29日に、第２回セカイト講演会として、世界遺産国際シンポジウム「海を渡った日本のシルク～アメリカとの交流～」を、文化庁の支援のもとで、オンライン方式によって開催しました。この国際ウェビナーのことは、本『紀要』第２号末尾の「調査研究の動向」報告でも簡単に触れられています。当日は、松浦利隆氏（群馬県立女子大学群馬センター教授）にコーディネイター役をお願いし、前橋市の群馬会館２階ホールの会場とアメリカをオンラインで接続して報告と討論を行いました。松浦氏による「生糸はアメリカでなにをしたか」、石井寛治による「近代日本における蚕糸技術の革新と国際移転」、アメリカのユーティカ大学教授David　Wittner氏による「日本の生糸とアメリカの絹産業の成り立ち」という基調講演のあと、パネル・ディスカッションでは井上直子氏の報告「日本のシルクがアメリカ、そして世界に与えた影響について」を受けて、討論が行われま

した。その様子は、同時通訳で参加者に伝えられ、後日動画ポータルから配信されました。『紀要』への掲載は、残念ながら行われませんが、初めての国際ウェビナーは、報告者と参加者の視野を一挙に拡大し、多大のインパクトを与えました。例えば、日本生糸の大量生産が世界の絹文化の大衆化をもたらしたことが世界遺産への登録に際して強調されましたが、その具体例としてはアメリカ合衆国での第一次世界大戦期の絹織物の爆発的な売れ行きが挙げられるに止まりました。しかし、ウィットナー報告や井上報告では、欧米での市民革命を行った市民たちの絹織物消費が自由化されたために拡大したことが指摘され、われわれの視野を大きく広げる必要があることが明らかになりました。また、ウィットナー報告では、日本とアメリカとの生糸を介する結びつきの強さが専ら強調されたのに対して、松浦報告や石井報告では、それはアメリカ市場での中国生糸と日本生糸の激しい競争の結果であって、日中の生糸生産の違いだけでなく生糸輸送や取引、とくに三井物産や三菱商事といった日本独特の総合商社の役割が重要だったという問題提起も行われました。この問題は、横浜の原合名会社が富岡製糸場を傘下に納めて生糸生産を展開しながらも、むしろ生糸専門の貿易商社としての活動に主たる努力を注ぎ、専門商社であるために総合商社のような安定的な発展ができずに挫折したという仮説にもつながるでしょう。

以上、最近のセカイトの活動を振り返りましたが、ヨーロッパ器械製糸技術のアジアへの移転が、アジアにおける伝統技術の革新と結びつきながら、絹消費の大衆化という近代消費社会の開始を推し進めた世界史的なドラマの一端が見えてきたように思います。もちろん、そこには近代化にともなう経済格差の拡大があったことも事実ですが、天然絹糸消費の拡大が中下層向けの人造絹糸の発明を生み、新たな絹文化が大衆を巻き込んで展開した側面も分析される必要があるでしょう。従来の戦前期日本製糸業の研究は、絹織物のための中間製品である生糸の輸出を通して外貨獲得の主役を演じたことを究明してきましたが、戦前・戦後を通ずる日本国内での絹文化の大衆化はどのような実態と可能性をもっていたかも検討される必要があります。本『紀要』に収録した第３回セカイト講演会での伊勢崎銘仙に関する報告は、まさにそうした先端的な研究動向を示すものと言えましょう。

セカイトの活動は、世界遺産の１世紀を超える活動が、先人たちのどのような工夫と苦労によって支えられてきたかを明らかにするものですが、そのためには産業遺産自体の保存と研究がなされるとともに、遺産に関する文書史料の発掘と分析が必要です。群馬県には養蚕製糸業を担った方々の足跡を示す貴重な帳簿や書簡などの文書史料が埋もれているように思います。そうした文書史料がありましたら是非セカイトに教えて下さるようお願いします。また、セカイトの研究成果は、世界遺産を見に来る見学者の方々に伝えられて初めて意味のあるものとなります。遺産の解説をされる方々には、どのような事実を伝えるべきかについてセカイトの研究員にご教示願えれば幸いです。

石　井　寛　治
（セカイト名誉顧問、東京大学名誉教授）